文芸選書

銀座八丁｜日本三文オペラ

武田麟太郎

福武書店

銀座八丁日本三文オペラ

武田麟太郎

福武書店

武田麟太郎（たけだ・りんたろう）
一九〇四年、大阪に生まれる。三高を経て東大仏文科に入学したが、左翼運動に従事し、ほとんど教室に顔を出さず、結局中退した。学生時代、藤沢桓夫らの「壮馬車」の同人に参加し指導的役割を果たした。一九二九年、「文藝春秋」に発表した「暴力」によって、一躍プロレタリア作家としての地位を確立した。その後、井原西鶴によって現実凝視の方法の強い示唆をうけ、一九三二年の「日本三文オペラ」を執筆して成功し、「釜ヶ崎」「市井事」「勘定」などの「市井事もの」を矢つぎばやに発表、「一の酉」（一九三五年）で短篇作家としての本領を発揮し、「朝日新聞」に連載した「銀座八丁」（一九三四年）で、清新な作風を確立した。一九三三年、小林秀雄らと「文學界」を発行したが、それにあきたらず、一九三六年、独力で「人民文庫」を創刊。発禁と内部の意見不一致のため一九三八年廃刊した。一九四六年没。

銀座八丁　日本三文オペラ

一九八三年一二月一〇日　第一刷印刷
一九八三年一二月一五日　第一刷発行
定価一四〇〇円

著者　武田麟太郎
発行者　福武哲彦
発行所　株式会社福武書店
東京都千代田区九段南二-二-二八
〒102　電話（03）二三〇-二一三一
振替口座（東京）六-一〇五〇九七

印刷・製本　大日本印刷
（落・乱丁本はお取替え致します）
© Fumiaki Takeda 1983

ISBN4-8288-2095-7 C0093

目次

銀座八丁　5
日本三文オペラ　109
一の酉　137
情婦　163
井原西鶴　179
解説　倒錯について　三浦雅士　223

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

銀座八丁―日本三文オペラ

銀座八丁

藤山さん、女の人から電話だよ、とガタピシする古い階段の中途から、下の果物屋の小僧が声をかけた時、ちやうど彼は鬚をあたり終つたところで、化粧水をヒリヒリする頤に塗り込んでゐた、誰からかな、と考へながら、下りて行つた。——ひよつとすると、バアテンダーの彼と同じく、西銀座の酒場「ロオトンヌ」で働いてゐる女給ののり子からかも知れない、けふは灯がついて店の開くまで、赤坂のホールで一しよに踊らうと約束してあつたのだが、急に都合が悪くなつたのかも知れない。

もうすつかり春になつて了つた、生暖かくて肌は汗ばむほどのいい天気である、明るい色彩に富んだ果物の官能的な香ひが、むうつと若い藤山の鼻を刺した。

「——こちらは、大森の豊田家でございますが」と、電線を伝つて来る、女中らしい声が云つた。

のり子ではなかつた、と思ふと同時に、なるほどと、彼は独りでうなづいたのである。

その待合は「ロオトンヌ」の女主人あき子のよく出入するところで、彼もまた度度彼女に連れられてお伴をしたことがある、——昨夜おそく、もうかんばん近くになつてから、あき子は誰かに呼びだされたと見え、ちよつと、といつてそそくさと出かけて行つたが、そのまま帰つて来なかつた、藤山は店のあとじまひをし、唯一つだけ点けた電燈の下で、その日の上り高と照合して

伝票を調べ、それを現金と一しよに小さな黒鞄に納めると、新富町の彼女の住居の方へ回つて見たが、留守番の老婆がひとりでゐるだけであつた、こんなことはよくあるので、彼は別に気にとめず、責任上鞄は預かつて、新橋二丁目の下宿へ戻つたのである。

「――あの、マダムがあなたにすぐこちらへいらしてほしいのださうですが」と、声は続けて云つた。

「ああ、さう――ゐるんですか、他に誰か」と、彼は念のために聞いて見た。

「――は、あの」と、漠然と相手は返事をして「その時、何ですか、鞄も一緒に持つて来て頂きたいつて」

「分りました」と、彼は癖の軍隊口調で、はつきりいつた、――また、勘定が足りなくなつたんだらう、だらしのない話だ、だがさうすると、彼女の方で払ひをしてやる相手にちがひないが、一体誰だらう、あいつかな、と胸の中でつぶやくのであつた、それにしても、二人がさんざん遊び興じていい思ひをしたあと始末に、こちらが行かねばならぬなんて、あんまり有難くもない役割だ、と苦笑した、そこで、わざと、ゆつくりしてやれと、

「ぢや、二時間ほどして、伺ひますといつて下さい、ちよつと先に果す用があるから」

のり子に逢つて、ゆつくり遊んでゐられない事情を話し、少しだけ踊つて行かう、それから大森へ行けばいい、と決めたのである。

すると、豊田家の女中は、あわてていつた。

「――もしもし、あの大急ぎでお願ひしたいんですけど――実は、マダムがお悪いんで！」

「悪いつて？　病気ですか」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「ええ、大へんなのですよ、けさがたから」

——何てことだ、と藤山は舌打ちした、待合で病気になるなんて！　彼は、昨夜からそこにゐたであらう相手の男にも、妙に腹立たしい気持で、洋服に着更へるのであつたが、お洒落なので、なかなか手間どつた。

果物屋から、春の陽ざしの中へ出て来た藤山の姿を、もしも彼をバアテンダーと知らない人が見たら、何ものと思ふだらう。

一分の隙もない青年紳士。

流行のラグランの春外套の下には、英国風に仕立てた淡鼠色の小格子縞を均整のとれた軍隊帰りの身体にうまく着こなし、同じ系統の縞色のマフラアも落ちついてゐるし、手套といい、ステツキといひ、すべてぴつたりとしてゐた彼の容姿を——夜ふかしの職業に係らず赤味を帯びた健康さうな頬、太い眉をあげる時冷い光に見開く眼、やや怒つた鼻も、気障つぽくまげる口も魅力がないとはいへぬ、幅広い胸を張り、少しく棄鉢気味に踏み出す足取りは映画の影響で、とがめてはならないだらう——さうした彼の容姿をたすけて、現代的な美を感じさせてゐた。

もちろん、彼が酒場「ロオトンヌ」から受取る給料は僅か卅円で、これに添ふるに毎夜消費される酒の空瓶が自分のものになり、酔狂な客によつては、女たちと同様にチップを呉れたりするが、総収入はどう考へて見ても、これだけの服装をするには不十分なものである、——だから、そこには何かあるのであらう。

藤山はゆつくりと煙草に火をつけながら、流してゐる自動車を物色してゐた。紳士に相応しい

良い車を拾はねばならないのである。
京浜国道は混雑してゐた、白つぽいアスフアルトは、トラツクや自動車、自転車で充満してゐて、黒い油のしみ出たタイヤの跡が幾すぢも残つてゐた、警笛や軋む車輪の騒音はぶつかりあつて、人をいらいらさせた。
鈴ケ森のガードを少し過ぎて、左側海岸の方へ折れると、急に静かになるのであつた。夜ならば、毒々しいネオンライトで、家の名を大きく屋根の上に出してゐる待合が二三軒立ちならんでゐたが、さすが白昼のことで森閑とした空気のうちに沈み、眠つてゐるやうであつた、磯の香が春風にはこばれて来た、海には海苔を採る人たちが、のどかに見られた。
豊田家の門から庭づたひに、よく肥えた女中に案内されて、藤山は離れの部屋へ通つたが、途中で「どうしたんだ」と、たづねた。
「喀血なさつたんですよ、——私たちは最初心中かと思つて大騒ぎしました」
ふんふんと、彼はうなづいた、あき子は前から肺が悪くて、彼が知つてからもさうした経験は幾度もあつたので、そんなら大したことはない、と彼は考へたのである。
しかし、いふまでもなく部屋の襖を開いた時、彼は急を聞いて駆けつけたといふ狼狽した色と、如何にも心配さうに眼を伏せた神妙な表情とを作つてゐた。
その離れの四畳半は、どういふ意味からか、四壁がちやうど腰の高さ程に鏡がはめこんであつた、だから、あき子の蒲団がいやにけばけばしい赤い色をあちらこちらに反射させてゐて、視力を奪はうとするのであつたが、彼は逸早く男が——黄色いくたくたのレインコートまでも着けたまま寝そべつてゐる男が誰であるかを見極めた。

やはり、あいつであつた。
だが、藤山はそちらの存在は全然無視したやうな冷い態度で、外套を脱ると、あき子の枕許に坐つて、
「どうしたんです、一体」と、詰問の鋭い響きをあいつに利かし、彼女の青ざめた額の上にかがむやうにした。
あき子は透きとほるやうな真白な顔になり、もの憂げに、大きな二重瞼を開いたり閉ぢたりしてゐた。
「もういいの、何でもないの」と、彼女はいつてから、括れた頤をちよつと突きだすやうに動かして、咽喉の奥の方で微かな咳をした、——普段でも、彼女はそんな力のない咳を、殊に何かおしやべりをした後には必ずしてゐたが、酒場では誰も気づかなかつた、その咳と両頰の不自然な赤さ、毛細管の先端まで血の走つてゐるのが判る赤さは、彼女の病気のしるしであつた、しかし、酒のせゐで小肥りした身体や化粧のために、寧ろ健康に見られたのである。
「最近は少し飲みすぎましたからな」と、藤山は堅い表情でいつた、——「御乱行もいい加減にして養生してもらはなくちや」
彼はレインコートを着た男の方へ眼をやつた、その男は、あひかはらず寝そべつたまま、あちらを向いてゐたが、油をつけてない髪の延びた頭に肘をかつて、不興気に新聞を繰りかへして読んでゐるのが、いびつな鏡に映つてゐた。
あき子は、胸にあててゐた氷嚢を取り出して、畳の上に置いた、すつかり生暖くなり、気味悪く、ぐにやぐにやしてゐた。

藤山は、それをつかむと、黙つて立ちあがつた、庭履きを窮屈さうに突つかけて、料理場へ行つたのである、そこで、氷を割つて入れかへながら、女中と二三の会話をした。
「昨夜は随分と酔つて、二時すぎになつて、いらつしやいましたわ、それからまた、お酒なんですもの」と、女中はあきれたやうにいつた。
苔の生えた古い庭石伝ひに戻つてくると、樹と樹との間に、ちらと動く人影があつた、それは急ぎ足に出口の方へ行つて了つたが、あのレインコートの男にちがひなかつた。
部屋に入ると、想像にたがはず、果して彼の持つて来た黒鞄は開かれてあつた、伝票はばらばらになつて枕許にちらばつてゐた、——やはりあいつに金を呉れてやつたのである。
あき子は、すぐ新富町へ帰りたい、といひだした、寝台車を呼んでくれ、それから、気がついて見ると、寝巻も買つて来てもらはねばならぬ、ここのを着て帰れないから、といふのであつた。
「大丈夫ですか、そんなことして、——もう暫く、静かにしてゐた方がよかないかな」と、藤山は危んだ。
「大丈夫、クラウヂンを二本注射したんだし、すつかりとまつてしまつたやうだから」
ぢや、せめて暗くなるまで、ここにゐませう、それに昼日中ぢやいくら何でも、恰好もつかないし、と皮肉をまじへたつもりで、彼はいつた。
「駄目」
さういひきつて、あき子は、ハンドバツクから小さな手帳を取りださせた。——そこには、日日の彼女の予定、彼女の所謂「ランデヴ」の表が簡単な符号で記されてあつた、午飯は誰とどこで、それから誰と逢つて映画を見に行く、次に、といつた風に手際よく時間を無駄なく区切り、

酒場に来る客の誘ひに応じてゐるのであつた、けふの男たちは待ち呆けを食ふわけである。

「五時頃、内田に資生堂で逢ふことになつてるの、――けふ、お金貰ふ約束なんだけど、まさか、ここへ呼ぶわけにもいかないしね、だから、どうしても帰らなくちやならないわ、その時分電話して、病気だから、住居の方へ来て下さいつて、云つて頂戴」と、咳したり、痰をはいたりしてはきれぎれにいつた。

――内田といふのは、彼女のパトロンで貴族であつた。

その内田が、赤玉のオランダチーズと果物籠とを携へて、新富町へ来たのは、五時をほんの少し過ぎた頃であつた。

「何故、もつと早く知らせてくれなかつたのです」と、彼らしい丁寧な言葉つきで、柔和にいつた、そして、三十五にしては生えあがり、艶々しく光つてゐる額や、和服の袖の中まで、手帛でにじみ出た汗をぬぐふのであつた。

ちやうど一時間前に、あき子と藤山は、やつとのことで、大森から戻つたのである、馴染の家でも借りるのが彼女は嫌ひで、今まで一度もそんなことはしなかつたが、その時は結局診察料薬代なぞは立て替へてもらはねばならなかつた。そこで、銀座のお店の方はよく存じてをりますから、といふ豊田家に、わざわざ住居の所在も教へて来たのであつた、――それから、担ぎ込まれた彼女に、すつかりうろたへて了つた婆やを促して取り敢ず、かかりつけの町医者を呼び、薬瓶なぞも枕許に取りそろへた、落ちついて、内田へ、青山高樹町の自宅へ電話をかけさせるとすでに彼は外出したあとであつた。

あき子は彼にいふのである。

「――でも、あまり御心配をおかけするのもどうか、と思ひましたので、それに、大したことはないんですもの」

さすがに、彼女は烈しい発作の後の衰弱を、帰つて来たので一安心したせゐか、今になつて見せはじめてゐた、少しくしはがれた声や、微かな作り笑ひも、殊に内田には、痛々しげに感じられた。

藤山は、ちよつと舌を出したい気持で、

「では、僕は店へ行きますから――どうせ、けふは日曜だから、閑でせうが」と、二人きりの時とはちがつた慇懃な態度で、病人にいひ、あす朝早く来て見ます、とつけ加へるのであつた。内田にもいやに四角張つた挨拶をして、表へ出た。

界隈の芸者置屋では、女たちが鏡に向つて化粧してゐるのが見られた。その小道を抜けて、三吉橋にかかつた。

歩きながら、藤山の頭には、今の内田の顔がこびりついてゐた。

――公卿華族らしく血色が悪くて、眼尻の下つた、受け唇の、全体に華奢といふよりは見るからに頼りない孱弱な肉体。事業好きで活動家だつた先代譲りの財産によつて、ふところ手のまま、無為徒食してゐる退屈な身分。絵をやつてゐるが、そしてその一枚は「ロオトンヌ」の黄色い壁にもかけてあるが、もとより拙劣で、取り立てていふほどの事はない、そのくせ、何や彼やと芸術に一片の趣味を持つてゐて、単調な生活のはかない装飾にしてゐる、刺戟を酒と女とに求めて、辛うじて生存の興味を呼びさまさうとするのだけれども、烈しくそれらに没頭して了ふだけの勇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.